English Immersion Camp 2003

Report

HOIYA!

＊HOIYA!は、キャンプでみんなが使った"元気の出るかけ声"です。

Communicating in English
—世界を感じた10日間— …… 2
子どもたちが教えてくれた平和へのヒント
—校長からのメッセージ— …… 5
英語が子どもたちを変えた！ …… 6
保護者の方から …… 10
公文式教室の指導者から …… 11
キャンプリーダー、熱いハートを語る
— **Impressions of the Camp Leaders** — …… 12
小学校の先生は、キャンプに何を感じたか？ …… 15
見学者からのメッセージ …… 15
キャンプの成功要因と分析 …… 16
イマージョンキャンプ概要 …… 18
Camp Leaders …… 21
Participants …… 22

KUMON

English Immersion Camp 事務局

"Welcome to the English Immersion Camp!"

ようこそ！

自己紹介ゲーム、ドキドキ

"Wow! Beautiful"

パソコンを使ってリーダーの国を調べよう

世界の国めぐり。フィリピンルームで

Communicating in English

グループ旗を囲んで、ハイ、ポーズ

Don't burn "the Chijimi!"

"Shall we dance?"

バンブーダンスに挑戦

今夜はバーベキュー

日記の発表

スヌーピーバスで遠足へ

アートクラブでお互いの顔をペインティング

世界を感じた10日間

スポーツフェスティバル

ぼくたちのプレゼンテーションは
「ライオンキング」だ！

"Makin' music"

楽器を作ったよ

"Kumon Kumon
we are together, we are one!"

楽しいキャンプファイヤー

アートクラブで仮面を作ったよ。
せーの、"Gets!"

休み時間もいっしょ

Message from the President of Kumon Japan

Hi everybody,
My name is Hiroshi Otake, I'm very happy to see you. To enjoy this camp, I'd like to send you just one message.
Don't be shy! Just try! Everybody, I'm sure that there are many English words in your minds, because you are studying English everyday. Just let them go out from your lips, then you will enjoy this camp. Do not be afraid of making mistakes when you speak English. These mistakes will improve your English. Don't be shy, just try and make many friends while enjoying English.
Thank you very much ! !

Hiroshi Otake

日本公文教育研究会 社長 大竹 洋司

Communicating in English 世界を感じた10日間

さよならパーティーで、リーダーたちからのパフォーマンス

卒業式

校長からのメッセージ

子どもたちが教えてくれた平和へのヒント

イングリッシュ・イマージョンキャンプ校長
鳥居健介

「I like English Immersion Camp. I don't want to go home. Thank you camp leaders.……」

卒業式の日、子どもたちは涙でくしゃくしゃになりながら、10日間惜しみない愛情を注いでくれたキャンプリーダーたちに、精一杯、感謝の気持ちを伝えることができました。そして、しっかりと抱き合う56名の日本の子どもたちと18か国28名のキャンプリーダーたちの姿は、「国や言葉、文化や考え方が異なっても、お互いのちがいを認め合い、わかり合うことができる。英語という、たった一つの言葉で、心を通わせることができる。We are one! そして私たち一人ひとりの努力によって、きっと今よりも平和な世界を築くことができるよ」と、教えてくれているようでした。

「21世紀を担う子どもたちに、世界の人たちとしっかりコミュニケーションできる英語の力をつけてほしい。そして地球社会、世界の平和に貢献できる人材に育ってほしい」という共通の夢・志を持つ人たちによって、2001年夏にスタートしたイングリッシュ・イマージョンキャンプも、今年で3年目を迎えました。

イマージョンとは、「どっぷり浸る」という意味です。子どもたちは、世界中から集まった留学生キャンプリーダーたちと10日間、世界の共通語である英語で生活しました。子どもたちにとっては、大人が想像する以上に大変な挑戦だったことでしょう。親元から離れて、見知らぬ国の人たちと初めての共同生活、しかも言葉の自由がきかないという状況の中……。最初は、緊張と不安でいっぱいだった子どもたち。しかし、キャンプリーダーたちの「愛」に包まれ、「自分を丸ごと受け入れてくれる」という安心感の中で、驚くほど積極的に英語でのコミュニケーションを楽しむことができました。英語だけでなく、失敗を恐れずに挑戦する力、やればできるという自信や自己肯定感を、さらに大きくふくらませることができたのです。

そして大人たちは、一人ひとりの子どもに心からの愛情を注ぎ、自信を与え、意欲を引き出すことに努める、周囲の人たちの存在がいかに大切であるかを痛感しました。また、何の分け隔てもなく、すべてを受け入れる子どもたちの、素直で柔軟な姿の中に、平和へのヒントを見つけたような気がしました。

現在日本では、日常的に英語を使う機会は多くありません。そのためか「英語は難しい。特別な人が使う言葉」という意識があるようです。しかし、今や英語を公用語とする国の数は60を超え、世界の4分の1から3分の1の人が日常的に英語を使っている、と言われています。もはや英語は、それを母国語として使う人たちだけの言語ではなく、母国語のちがうもの同士がコミュニケーションをとるための大切な道具なのです。キャンプを通して、56名の子どもたちが、はっきりと教えてくれました。「英語は、世界の人とわかり合うために、だれもが使えるステキな言葉。そして、伝えたい気持ちと、わかり合いたい気持ち、愛こそがコミュニケーションの始まりなのだ」と。

一人でも多くの子どもたち、そして大人たちにもこのことをお伝えし、感じていただきたいと思います。Don't be afraid of making mistakes! Let's try communicating in English! みんなの明るい未来を築くために。

最後になりましたが、子どもたち、キャンプリーダー、スタッフ関係者のみなさん、このキャンプを支えてくださったすべての皆さんに、心から感謝申し上げます。

英語が子どもたちを変えた！ Communication！

イマージョンキャンプの目的は、英語を正しく使うことではない。
まちがっていてもいいから、英語を使って「コミュニケーションをとること」が目的だ。
そして、一度コミュニケーションの楽しさを体験した子どもたちは、
世界をもっと知りたくなり、自分のことや日本のことをもっと伝えたくなる。
優介は、キャンプ中のある体験を通して、新しい発見をした。

小野 優介（小５）

ぼくはこのキャンプに参加して、自分に自信がつき、いろいろなことで恥ずかしがることが少なくなりました。例えば、食堂で食べ終わって店から出るときに、今までは小さい声で「ごちそうさま」と言っていたけれど、このキャンプに来てからは、大きな声でどうどうと言えるようになりました。なぜなら、キャンプリーダーが緊張をほぐしてくれて、一生懸命に、英語で話をするようにさせてくれたおかげで、自分の気持ちを伝えることが恥ずかしくなくなったからです。

もう一つ、キャンプ中にリーダーと話をすることで、新しく発見したことがあります。それは英語できちんと話をするためには、自分も日本のことがわかっていなければいけない、ということです。例えば、友だちが「いなりずしは、英語で何て言うんだろうね」とぼくに質問してきたときのことです。ぼくはわからなかったので、和英辞書をひいてみました。でも載っていませんでした。だから「いなりずし」の「いなり」という言葉から狐を思い浮かべ、「FOXずし」とでたらめに言ってしまいました。リーダーたちは「狐のすしか」と思ってしまったようですが、そのときは悔しいけど、正しく言えませんでした。家に帰って、国語辞書でいなりずしを調べたところ、油揚げは狐の大好物とされているので、油揚げで包んだおすしをいなりずしという、と書かれていました。今度はリーダーに、正しく説明したいと思います。

思いきりコミュニケーションをしたその先には、
何があるのだろうか。キャンプで諭似に起こったあるできごとが、
その答えを教えてくれた。

長谷部 諭似（小４）

６日目に突然熱が出てしまいました。夕方、近くのクリニックに行って薬をもらって飲んだのに、夜中に熱が41度を上回ってしまったのです。タクシーで大きな病院へ連れて行ってもらい、５時間点滴を受けました。

次の日の昼から熱が下がって、ナースとお昼ごはんを食べていたら、ぼくの４人のキャンプリーダー（HELEN, MALI, KWAME, VAUGHAN）が保健室に来ました。そしてニコニコしながら、「early split」と言って、カードと折鶴を渡してくれたのです。そのときHELENが「このカードはGET-WELL cardといって、病気の人に早く元気になって、と渡すカー

ドなのよ」と教えてくれました。そのカードには、グループのみんなとキャンプリーダーたちのメッセージが、たくさん書いてありました。半分くらい読んだとき、急に胸が熱くなって、ぼくは泣きました。このカードと100羽の折鶴には、ぼくに早く元気になってほしいという願いがこめられているんだなあと思うと、とてもうれしかったです。

このキャンプで、コミュニケーションをすることが一番大切だと思いました。国、人種、文化、言葉、食べ物などがちがっていても、英語という言葉を使って話したり、お互いに思いやったりすることで、友だちになれるということを知りました。友だちになるには、自分の気持ちをなるべくたくさんの言葉に表して、伝えることです。

英語がじょうずに話せなくても、自分の気持ちを伝えようとすることが大切なことや、相手の気持ちを聞こうとすればだいじょうぶだ、ということがわかりました。ぼくは、これから世界に、たくさんの友だちを作りたいと思います。世界中のすべての人が友だちになれば、戦争はなくなって、世界は平和になると思いました。ぼくは病気になって、みんなに心配をかけてしまったけれど、みんなの心の温かさを知って、たくさんの大切な思い出ができました。

コミュニケーションの先にあったものは、「人の心の温かさ」や、「思いやりの気持ち」だったと諭似は言う。伝えたい心と理解しようとする心があれば、きっとわかり合えることを、子どもたちは教えてくれた。

Dream !

**子どもたちの夢は、無限大に広がっていく。
今まで知らなかった世界に触れたとたん、それまで持っていた夢が進化する。
夢に向かう途中の子どもたちには、失敗を恐れる気持ちはない。
なぜなら、失敗を恐れずにチャレンジすることが、夢に近づく道であることを、
すでに知っているから。和則(かずのり)は、彼の夢「宇宙飛行士」に、新たな夢を「追加」した。**

吉延(よしのぶ) 和則(かずのり)(小5)

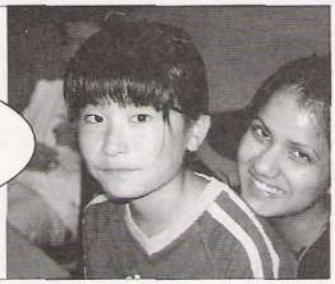
ぼくはこのキャンプで、いっぱい大切なことを学びました。自分に自信を持つこと、何にでもチャレンジすること、最後まであきらめないことです。

10日間が終わって、キャンプに行く前より自信がついたし、自分のことが好きになりました。お風呂への行きがけに、キャンプリーダーや友だちと"Hello Goodbye"を大きな声で歌ったり、旗を作るときにみんなでデザインを考えたり、キャンプファイヤーでマシュマロを焼いて食べたり、一つ一つがとてもいい思い出です。みんなで過ごしたキャンプでの10日間を、絶対忘れません。ぼくは宇宙飛行士になるのが夢で、英語をがんばってきました。でも今年のキャンプで、キャンプリーダーがいつもぼくたちをはげましてくれたり、助けてくれてうれしかったので、将来、ぼくもいろいろな国の人を助ける仕事がしたいなあ、と思うようになりました。だからぼくの夢は、宇宙飛行士か国連で働く人です。どっちもなりたいので、両方になろうと思います。そして来年のキャンプには、パワーアップして、また、みんなと再会できることを楽しみにしています。

I promise I will come back next camp.

Challenge & Confidence !

大人たちは、キャンプから帰ってきた子どもたちの様子を見て、
一様に「一回りも二回りもたのもしくなった」と表現する。
もちろん、ただ参加するだけでは、そうはならない。
子どもたちは、胸をドキドキさせながらもチャレンジをして、自分で誇りを勝ち取る。
だからこそ、ゆるぎない自信を身につけることができるのだ。
里紗にとっての毎日は、ワクワクするチャレンジの連続だった。



川井 里紗（小５）

１日目は、ドキドキして、なかなか話しかけることができませんでした。でも、キャンプリーダーはみんな優しくて、ちがう班のリーダーも、どんどん声をかけてくれました。２日目や３日目になると、友だちにも、キャンプリーダーにも慣れて、少しずつ自分からも話せるようになってうれしかったです。文法が正しくなくても積極的に話しかけることができたら、わかってもらえるんだ、と思いました。

このキャンプで学んだのは、自分から積極的に話すということ、グループ活動のおもしろさ、そして協力が大事、ということです。英語で話すのはまだまだですが、来年までに英検３級をとって、絶対もう一度、イマージョンキャンプに行きたいです。

恵梨は、４日目に少し落ち込んだ。
そのとき、ある言葉が頭をよぎった、という。
"Don't be afraid of making mistakes. Let's try communicating in English."
「まちがえても、いいんだ！」
だれかに教えてもらったわけでもなく、自分で気づいたことだった。

小宮 恵梨（小６）

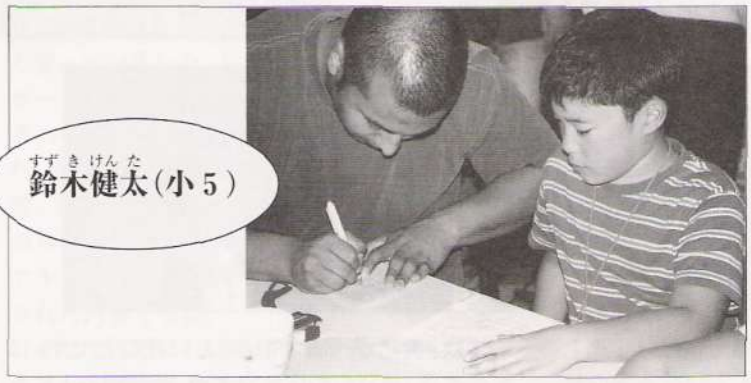
わたしはこのキャンプで、いろいろなことを学びました。友だちの大切さ、失敗を恐れないこと、そしてやればできるということ。本当に楽しい10日間でした。

でも４日目に、(なんて言っているかわからないし、なんて言えばいいのかわからないよ。もうやだなぁ……)と思い始めました。でも、キャンプリーダーや友だちといっしょにいると、とても楽しいのです。そのとき、フっと、頭に"Don't be afraid of making mistakes. Let's try communicating in English."という言葉がうかんできました。「そうだ！　まちがえてもいいんだ！　失敗を恐れないでがんばろう！」という思いが、こみ上げてきたのです。そして次の日から、キャンプリーダーともっと仲良くなれました。本当にうれしくて、本当に来れてよかったと、心からそう思いました。

そして、キャンプでは、いろいろな思い出ができました。どの思い出も、とてもすてきな思い出です。何があっても絶対に忘れない、一生の思い出だと思います。

Feel the World !

「ぼくたちは、日本人であると同時に『地球人』だ。」
子どもたちは、そのことに気がついた。
はだの色も髪の色も、一人ひとりちがっていて当たり前なのだ。
そして、自分もまわりの友だちも、
みんなが世界という大きな大きなパズルを作っている、ピースの１つなのだ。



鈴木健太（小５）

ぼくは、英語が通じたことがすごくうれしかった。10日間は長いけれど、ぼくには５日間くらいに思えた。

あやふやだけど、少しでも気持ちをわかってもらえるように、一生懸命話した。リーダーと、ゲームとかが少ししかできなかったことが心残りだ。いつも、明日も遊べると思っていたら、最後の日になってしまい、とても悲しかった。

もう会えなくなってしまうかもしれないことが、とても悲しくて、涙がとまらなくなってしまった。ここでできた友だちは、とてもやさしかった。

ぼくは、絶対にこの経験を忘れない。英語が話せるということが、すばらしいものだ、ということがわかった。英語が話せると、世界の人と話し合うことができる。心から、リーダーたちとわかり合えた。

このうれしさと別れる悲しみは、ずっと心に残ると思う。ぼくには白髪があって、ずっとコンプレックスに感じていたけど、一人ひとり、みんなちがうんだ。はだの色がちがっても、中は同じ心を持っている。ぼくは、リーダーたちが大好きだ。外国人なんかいない。ぼくたちは、みんな地球人なんだ。

健太は、キャンプの終わった今でも、リーダーたちと積極的に連絡をとり合っている。ある日、電車の中でキャンプリーダーに似た外国人を見かけた。健太は、その人に英語で話しかけたという。「He was gentleman, very kind to me. I enjoyed talking while a hour!」と、イマージョンキャンプのホームページに、健太は書いている。

※子どもたちの英語は、原文のまま掲載しています。

Love and Thanks !

イマージョンキャンプの秘密を一言で表すならば、
「子どもたちに対する惜しみない愛」である。
それは、子どもたちに接するキャンプリーダーの愛であり、
子どもたちを囲む大人の愛である。そして愛情をたっぷりと注がれた子どもたちの心は、
自信と感謝の気持ちでパンパンにふくらみ、家路につく。
祐太郎(ゆうたろう)は、幼いころから英語を勉強していた。
イマージョンキャンプで英語を実際に使いこなし、自信をつけた。

谷口(たにぐち) 祐太郎(ゆうたろう)(小4)

このキャンプのすべてが、ぼくにとって楽しかったです。とくに楽しかったことは、キャンプリーダーや友だちと、交流ができたことです。友だちは楽しく、早く仲良くなれました。キャンプリーダーはやさしく、おもしろかったので、気楽に話すことができました。英語について、苦になったことはありませんでした。まちがえたことは、まれにありましたが、別に困りませんでした。

ぼくはこのキャンプ中に、誕生日をむかえました。「こんなに祝ってくれるなんて、うれしい」と思っていました。

このキャンプで学んだことは、英語を話すことはもちろん、「世界中の人とコミュニケートするには、英語が一番である」ということです。ぼくの夢は、雑貨店の店主ですが、英語圏の人にも対応できるように努力したいです。このキャンプで、「ぼくは意外に英語が話せる！」と思いました。しかし、キャンプで使った文法や単語は、習ったものの半分くらいでした。日常生活では、少ない文法でもＯＫなのだと思いました。

ぼくは、このキャンプに来年もぜひ来たいです。来ることができたときのためにも、もっともっと、もっともっと英語を勉強したいです。有意義な10日間を過ごしました。キャンプリーダーのみなさん、公文スタッフの人たちには感謝しています。

保護者の方から

帰りのバスの中で、帽子を顔でかくして泣き続ける息子を見て、どんな10日間だったのかが私に伝わってきて、胸がしめつけられる思いがしました。今まで勉強でしかなかった英語。英語に対する考え方に、大きな変化があったのだと思います。
（5年生の母）

キャンプリーダーの自国のエピソードなども強烈に心に残っているようで、この小さな町にいて世界を語ってくれる娘が、とてもたのもしく感じられました。
（5年生の母）

子どもと接して驚いたのは、英語でコミュニケーションをはかることに、ものおじしなくなったことでした。まちがいを恐れずに、懸命に英語で話す姿を見るにつけ、今回のキャンプが、いかに子どもによい刺激になったのかが、はっきりとわかりました。
（4年生の父）

キャンプリーダーの方々の、愛情と誠意を持って、ほめて育てる姿勢を、親も見習いたいと痛感しました。
（4年生の母）

英語の体験はもちろんですが、キャンプリーダーやチームメイトのみんなと過ごしたさまざまな体験と友情は、子どもにとって大切な宝物となり、今後の子どもの人生にとって、すごく大きな思い出の1ページとなることでしょう!!
（4年生の父）

イマージョンキャンプは、保護者や公文式教室指導者の目にはどのように映ったのだろうか。祐太郎のお母さん（谷口かおりさん）と、彼が通っている公文の教室の先生（野田川教室・亀井月美先生）は、こんなふうに感じていた。

お母さまより

ひどく感動したことがあり、どうしても感謝の気持ちとともに伝えたかったので、ここに書きます。留学生のキャンプリーダーのことでした。もっと安易に、留学生の中から希望者を募り、簡単な打ち合わせで当日を迎えておられると思っていました。ところが、昨年のキャンプレポートを読んで、驚きました。なんと多数の希望者の中から、面接や教育観の記述により選考され、さらにキャンプリーダーの研修や２回の合宿、また九州の地域で模擬キャンプを１日しておられるとのこと。本当に感激しました。マニュアルも、子どもたちのメンタルケアまでも考慮された内容でした。

そして実際に、入学式や卒業式でキャンプリーダーが子どもたちに接しておられる姿を見て、「なるほどー」と納得できました。留学生のみなさんだけでなく、日本人スタッフの方々の真摯な態度にも、頭が下がる思いでした。校長先生が卒業式でお話しされていましたが、留学生のみなさん、また公文スタッフの皆さんの愛を感じました。10日間、子どもたちに惜しみなく、愛情を注いでくださったので、ホームシックにもならずに過ごせたのだと思います。

若いキャンプリーダーのみなさん、Try making the world better!　You can do it!

公文の先生より

英語には、毎日プリントで接しています。しかし、英語でコミュニケーションをとる機会は、日常生活ではほとんどなく、英語力は確かにつけているのですが、実生活の中で試してみる場がありませんでした。このキャンプで、今まで溜めてきた能力を思う存分発揮でき、「自分の英語力で困ることはないことを実感した」と、自信をもって報告してくれました。谷口くんを見ていて、ますます子どもの可能性の深さ、学びとる吸収力の強さと速さ、未知の世界へ挑戦する意欲を感じます。きっと、今の谷口くんにとっての喜びは、知らないことを知るおもしろさを快感としているように感じられます。ますます「たのもしさ」が出てきた谷口くん、来年も必ず参加すると言い切っています。

子どもたちに必ず共通して言えることが１つある。それは、子どもたちの変化はイマージョンキャンプの10日間だけでは決して現れない。そこには、必ずご両親や公文の先生のような、その子を見守る大人が存在している、ということだ。

公文式教室の指導者から

●彼は卒業式で、"I like English!"と言ったのだそうです。指導者として、うれしい言葉でした。毎日つけてきた日記も見せてくれ、それに添えられたリーダーたちのやさしい言葉を、スラスラと読み聞かせてくれました。これにも驚き！　文字通り、英語を生きた言葉として、当たり前のように受け入れている姿でした。

●今回の経験は、英語のみならず、すべてのことに積極的に取り組めるようになったという、人間的な成長をもたらしました。今後も、このキャンプを通じて、多くの子どもたちに成長の機会を与えていただきたいと願っています。

●最初は戸惑いばかりの子どもたちが、日々刻々と変化し、積極的に行事に参加し、自己をしっかり表現し、主張できるようになっていく様子。分け隔てのないキャンプリーダーたちの子どもたちに対する深い愛情。母国のために尽くしたいという、崇高で切実で、真摯な思いをもったキャンプリーダーたちとの魂の触れ合い。これは、まさに１つの愛情物語です。

キャンプリーダー、熱いハートを語る
—Impressions of the Camp Leaders—

キャンプにおける、貴重な存在であるキャンプリーダーたち。彼らの大切な役割は、10日間、子どもたちといっしょに生活して、子どもたちがベストを尽くせるようにすることである。

そのために必要なことは「本当の愛」。国がちがっても変わらない愛である。キャンプの10日間で、子どもたちは、愛をたっぷり浴びることができた。その愛をもとに、キャンプは、子どもたちの英語力が飛躍し、子どもたち自身までもが成長できる場となった。

キャンプ終了後、キャンプリーダーたちが記した感想文からの抜粋を紹介する。

MAZHAR
（シンガポール）

Ten memorable days

Dear children of English Immersion Camp 2003,

It has been a great wonderful 10 days staying together, eating, playing, laughing, screaming and shouting, singing, dancing, helping each other and tries to communicate in English. But most importantly is not only having fun. I hope all of you did learn many things from this camp especially in understanding towards each other not only from your friends in your group and room mates but also from the camp leaders who came from different countries and speak different languages. These memories (sweet & bitter), and experiences do not come very often in your life especially those children have never been to other countries! I hope you have taken these chance to make yourself a more better person and let your dream not only grow bigger but keep them ALIVE! Remember even though we (camp leaders) sometimes were 'angry' and 'scolded' you, there's only one word to say about how we felt about all of you, that is.....L O V E!!!!!! Camp leader's love for all of you has no boundaries. You are like our own children, younger sisters and brothers, and friends! Your images laughter and voices will remain in our life! I hope those 10 days we have spend together has turned your fear into confidence, cries into laughter, sad to happiness, lonely to togetherness dependent to independent, weak to strong and hatred to love. Finally camp leaders and Kumon staff can give our fullest support and love to all of you. It is up to you to accept it and develop and expand them throughout your life! Hope to see you greatest god's gift lovely 'creatures' in this earth. Forget me not!

イングリッシュ・イマージョンキャンプ2003に参加した子どもたちへ

英語に取り組みつつ、お互いを助け合い、踊ったり、歌ったり、叫んだり、笑ったり、遊んだり、食べたりして、本当にすばらしい10日間でした。でも楽しいだけではなく、キャンプからいろんなことを学んだでしょう。

特に、お互いを理解し合うこと。グループの中だけではなく、ちがう国から来た、ちがう母国語を持っているキャンプリーダーたちとも理解し合うことができたでしょう。このキャンプで得たような経験や思い出を作れる機会は、人生の中でもめったにない事です。なかでも、他の国に行ったことのない子どもたち。この機会を通して、自分をもっと成長させ、そして、自分の夢をふくらますだけではなく、生かすこともできたでしょう。

1つ覚えておいて欲しいのは、私たちキャンプリーダーが叱った事があったとしても、みんなに対する気持ちは、1つの言葉でしか言えないということ。それは……、愛です!!! あなたたち、みんなに贈る無限の愛です。みんなは私たちの子どもであり、妹や弟であり、そして、友だちなのです！ みんなの顔、笑い、そして声も、ずっと私たちの心の中に残るでしょう。いっしょに過ごしたこの10日間が、みんなの恐れを自信に、涙を笑いに、悲しみを幸せに、孤独を親しみに、依存を自立に、弱さを強さに、そして、憎しみを愛に変えたことでしょう。

最後に、公文スタッフやキャンプリーダーのすべての愛と支えを、みんなに贈ります。その愛を受け取り、これからの人生において発展させて、ふくらませることができるのは、あなたたちだけです。神様からの贈り物であるみんなに、また会いたいです。私を忘れないでください！

NANA
（ガーナ）
&
康熙（やすひろ）

The camp experience

Success can only be achieved through hard working. English has been proven in the whole world that it is the common language for communication. Nearly two weeks with children all over Japan has been the happiest days of my life. After this camp they all begin to have the sense of confidence in speaking and communicating with English to people from different countries. The wake up call was very early to most of the leaders but with the love we have for the kids we couldn't help in seeing them every morning. I was over whelmed when I heard these children say "I don't want to go back" "Kumon staffs don't take me home" "I will never forget this camp", my heart grew bigger for these children. My plea now is for them to put what they learned at the camp into practice.

一生懸命に勉強することなく、成功はありません。英語は、世界の共通語であることはあきらかです。日本中から来た子どもたちといっしょに過ごす事ができた2週間近くの日々は、私の人生で一番幸せな時間でした。
このキャンプが終わって、子どもたちはちがう国から来た人と英語で話すことに自信がついたと思います。キャンプ期間中、朝は早かったけれども、子どもたちの姿を見たくて、わくわくした気持ちで毎朝起こしに行きました。
子どもたちの"帰りたくない""家に帰さないで！""このキャンプを絶対に忘れない"という声を聞いた時、うれしくて胸がいっぱいになりました。私からのお願いは、キャンプで学んだことをどんどん行動に移していって欲しい、ということです。

毎朝、NANAからの愛情を感じた町田康熙（まちだやすひろ）（4年、埼玉県）

ぼくは、このキャンプでたくさんの友だちを作り、たくさんのキャンプリーダーと知り合うことができました。ぼくのグループの名前はCool 1です。……パーティーのときには、キャンプリーダーやスタッフが、芸やダンスをしてくれました。それは、とても面白かったです。朝起きた時と夜寝る前に、NANAがだっこしてくれて、うれしかったです。卒業式の時には、仲良くした友だちや、やさしくしてくれたキャンプリーダーと別れるのがさびしくて、涙が出てきてしまいました。

KISSA
（フィリピン）

Giving your all

There's this really popular song I like and the lyrics contain this line "you only get what you give"—and to summarize the camp, I would use that same exact line. This year's camp was definitely a success because everyone gave it their all. Their time, love, devotion, not to mention, their precious hours of sleep just to make this camp as wonderful as it was. I have to say it is quite hard for me to look back on the past 10 days. Just yesterday, the kids were here, and now, I am kicked back to reality. But then again, no matter how much I miss the children and the camp, I think it is good enough that we actually have such a good memory to look back to. I miss all the kids in the camp, especially the ones in my group, Cool One I love you all.

ある有名な曲の"与える物しか得られない"という歌詞が好きです。私がキャンプのことを一言で言うとしたら、きっとその言葉を使うでしょう。今年のキャンプを成功させるため、みんなは自分のすべてを出しきりました。そして私たちリーダーは、時間、愛、献身、そして寝る時間まで。子どもといっしょに過ごした時間は昨日のことのように感じられますが、その現実を思い出すと、ちょっとさびしい気持ちになります。でも、どれだけさびしくなっても、子どもたちとの思い出があるから幸せです。子どもたちに会えないのはさびしいです。
特に私のグループ、Cool 1のみんな、愛しているよ。

DUSHI
（スリランカ）

Effort and progress by the children

A quiet drone of voices in the cafeteria is all that could be heard on the last day of the English Immersion Camp 2003. The reason for this was simple, all the children were gone and the camp leaders were just walking around aimlessly not too sure what to do with themselves! 10 days filled with activities, laughter and love just flew by and on that last day we were all feeling a sense of loss.

At the beginning the children were not too confident but not even half way through the camp they bonded with their leaders, made friends with the children in their group as well as with others and were enthusiastic to practice for their performances and presentations. The effort and progress that many of the children made is a great thing! I think their parents would be very proud of them.

キャンプの最後の日、カフェテリアでは、低い声しか聞こえませんでした。その理由は１つ、子どもたちが、もう帰ってしまったからです。リーダーたちは何をすればよいのかわからずに、意味なくぶらぶらと歩き回っていました。グループ活動、笑い声、そして愛でいっぱいの10日間があっという間に終わって、リーダーたちは何かを失った様子でした。キャンプが始まったころ、子どもたちは自信がありませんでした。しかし、じょじょにリーダーたちと触れ合い、グループの友だちと仲良くなって、意欲的に練習し、発表することができるようになりました。彼らの努力や進歩は、本当にすばらしかったです。みんなのご両親は、きっとみんなの事を誇りにできるだろうと思います。

CHAN
（韓国）

My friends

While those children were learning to grow the confidence in their English, I was learning how to be a child once again. I joined the camp as a camp leader but really I was one of the kids. I was laughing and playing with them everyday not as a leader or a role model but I was their friend. I was indeed a friend of theirs during those 10 days. There's happiness in my belly. There's a warmth growing in my soul. There's a beauty in every child's smile. I miss those children, my friends. I miss writing notes with them. I miss giggling and playing arm wrestling with them. It was a good experience, beautiful memory and something I'll miss a lot in my life. It taught my heart to sing. Thank you everybody. I'm deeply in love with all of you guys.

子どもたちが英語への自信というものを学んでいる間に、私は、どうすれば子どものようになれるかを、もう一度学びました。私はリーダーとしてキャンプに参加しましたが、まるで子どもの一人のようでした。毎日、彼らといっしょに遊んだり、笑ったりしました。リーダーとしてではなくて、友だちとして。この10日間、本当の友だちでした。胸にうれしい気持ちがこみあげてきました。心に温かい気持ちが広がっていきました。一人ひとりの子どもの微笑みには、美しさがあります。その子どもたち、私の友だちに会えなくてさびしいです。彼らと手紙を交換したり、いっしょに笑ったり、腕相撲をやったりできなくて、さびしいです。このキャンプは感動の経験、この美しい思い出をずっと大切にします。心が歌えるように教えてくれた。みなさん、ありがとう……、あなたたちを愛してるよ。

小学校の先生は、キャンプに何を感じたか？

教員研修の一環として、英語でのコミュニケーションのあり方を学ぶために、愛知県東海市の教育委員会からキャンプに派遣された浅野先生と井村先生。小学校の先生の視線に映ったものは……。

浅野京子先生

井村秀子先生

「教員」という立場だからであろう。２人の先生の視線は、自ずとキャンプリーダーの子どもたちへの接し方に集中した。どのように子どもたちの緊張を解きほぐし、コミュニケーションをとるのか？　つまらなさそうな態度を示し続ける子どもに、どう対処するのか？　浅野先生と井村先生にとって、日々、驚きと感動の連続であった。

つねに子どもたちに話しかけ、言葉とともにスキンシップを忘れない。気にかかる子どもの様子を、複数のリーダーがいつも「背中」で見ている。そして「あ・うん」の呼吸で、体全体を使って受けとめていく。叱り方もじょうずだ。愛情をもって叱るから、子どもたちも素直に聞き入れる。そんなリーダーたちから見守られ、子どもたちが人間として成長、変化していく様子を目の当たりにした10日間。浅野先生は、キャンプを次のように締めくくった。

「リーダーとの別れが悲しいほど、子どもたちはコミュニケーションの大切さを感じ取ったのではないか。リーダーともっと話したかった、もっとリーダーのことを知りたかったという気持ちが、今後の英語への興味・関心を高め、学ぶ意欲へと結びついていくことを確信している。」

見学者からのメッセージ

子どもたちの、ちょっと怖い、ちょっと興奮、ちょっと不安、ちょっと冒険、ちょっと、ちょっと英語、の姿を拝見し、抱きしめてやりたくなりました。ほおずりしてやりたくなりました。

キャンプリーダーたちの一生懸命な姿、教育というのは、ああいう「伝えたい」という一念の結晶なのでしょう。彼らがいろいろ工夫して、いかに「伝える」かに知恵を絞っていることが、とてもうれしく思いました。

子どもたちにお伝えください。

I really like nobinobi English you guys are speaking in the camp. I love it.

船橋 洋一
（朝日新聞・本社コラムニスト）

イングリッシュイマージョンキャンプには、英語で育つ場と、育てる力と、育ちたい人たちがいた。英語を聴く能力が高ければ高いほど、コミュニケーション力も広がる。

教室での英語学習で、ＣＤを聴くことがさらに楽しくなっていく。もっと英文を読んでみたいと思う。やればできると、子どもが自分で確信する。目標を持って、これからも英語をがんばってみたいと自己表現する――英語を好きになるということは、こういうことではないだろうかと、キャンプを見学して、わたしはつらつら考えてみた。わたしは、生徒が進んで学習する正体をつかみかけていた。

武井 知子
（公文式津村教室指導者）

キャンプの成功要因と分析

1．成功要因

イングリッシュ・イマージョンキャンプの目的は、

- ●子どもたちが、世界共通語である英語を使ったコミュニケーションの成功体験を持つこと
- ●子どもたちが、いろいろな国や地域の人たちとの共同生活を通じて、それぞれの考え方や文化を知り、地球人としてお互いを理解することの大切さを知ること
- ●子どもたちが、自信を持ち、未知のことにも積極的に挑戦しようとする力、さらに高い目標に向かって努力しようという意欲を高めること

の３つである。これらは、十分に達成されたわけだが、その成功要因は大きく分けて、以下の２点である。

①子どもたちが持っていた力

・日頃の学習を通じてしっかりと身につけていた「英語力」

・未知のことや英語でのコミュニケーションに「挑戦する力」、「意欲」

②子どもたちの力を存分に発揮させることができた環境

・キャンプリーダーの、子どもたち一人ひとりに対する心からの「愛」

・子どもたち一人ひとりを尊重し、安心感、自信と達成感を与えることのできる「スキル」

・各時期のテーマに基づき、明確な目標を持って計画、配列された「プログラム」

2．分　析

①「子どもたちが持っていた力」について

子どもの応募条件としては、「本人の意思で参加を希望していること」をいちばん大切に考えた。次に「意欲的に英語を学習していること」を重視し、その判断材料として「英検４級程度」「公文式英語学習者の場合、ＨⅡ(中２程度)終了」の英語力を目安として提示した。これは、10日間にわたる英語での生活で言葉や考え方のちがい、人間関係などの壁にぶつかったときにも、自分の力で乗りこえてほしいという理由からである。

結果的に、英検４級以上保有者が全体の64%(5級以上：93%)を占めた。また、参加者56名のうち55名が公文式英語の学習者であり、ＨⅡ教材(中2程度)終了以上の者が55%であった。全体的に見ると、参加者の英語力は、目安として提示した基準よりも若干低目ではあったが、「それでも挑戦したい」という意欲の表れと見ることができる。

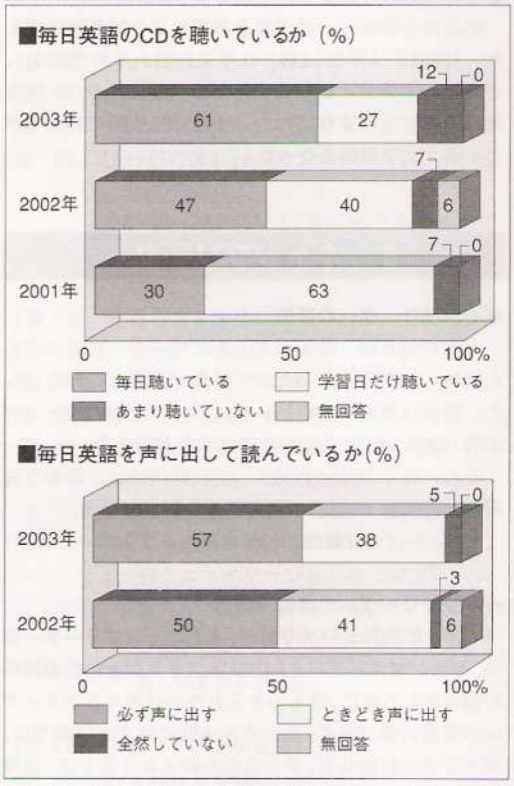
しかしそんな子どもたちも、初日の受付では緊張と不安でいっぱいだった。そして私たちスタッフは過去２年間の経験から、「最初の３日ほどは、まちがえることの恥ずかしさ、うまく気持ちが通じないことへの不安から、英語を使いたがらない状況も起きるだろう」と予測していた。しかし、その予測は見事に裏切られた。多くの子どもたちは、入学式直後のアクティビティーから、積極的に英語でのコミュニケーションを楽しみはじめ、あちこちから笑い声とともに、キャンプリーダーとじゃれあう姿が見られた。そして、英語での日記。ほとんどの子どもにとって初めての経験であったと思われるが、まちがいを恐れる気配もなく、自分の気持ちをどんどん書いていく姿は圧巻であった。日記発表では「ぼくに読ませて！」「私に読ませて！」という猛烈なアピールが始まった。

同じ状況になったのは、１年目が９日目、２年目が３日目。それが今年は、なんと初日から。子どもたちの可能性は、大人の想像をはるかに超えていた。しかし、どんなに特別な環境でも、急に英語が使えるようになる、などということはありえない。これだけ積極的なコミュニケーションが楽しめたのは、日々の学習において「英語を聴いてわかる力」「自分の気持ちを表現できるだけの英語力」をしっかりと身につけていたからである。

とくに今年の参加者は、英語を声に出すことへの抵抗が少なく、英語を積極的に使おうとする姿勢が強かった。抽選の結果ではあるが、参加者の多くが公文の

英語学習者であったことから考えて、これは2002年4月に公文式の英語教材が大きく改訂されたことと関係が深いのではないか、と思われる。コミュニケーションの場面を想定した題材を使い、プリント学習（読み書き）とともに、英語を聴くこと、声に出して読むことを重視したトレーニングを毎日積み重ねてきた成果といえるだろう。

参加者の、日頃の学習状況の変化



ところで、小学生の英検4級というと、かなり優秀な子どもと映るかもしれない。しかし、日々コツコツと学習を続けることで、このレベルの実力をつけることは十分に可能である。現に2002年度の小学生以下の英検合格者は、76,560名に達している。むしろ将来的には、小学校での英語学習も視野に入れ、小学生でめざすべきはこのレベルと考えられる。

②子どもたちの力を存分に発揮させることのできた環境」について

子どもたちは、なぜこれほど積極的に英語を使えたのか？　もう1つの答えは、なぜ彼らが英語を使いたくなったか、ということの中にある。その最大の要因はキャンプリーダーだ。

子どもたちが何かするたびに、「Good Job! Excellent! Super!……」と明るいほめ言葉が飛びかった。一人ひとりの子どもを、ほかのだれかと比較することもなく、丸ごと受け入れる……、このキャンプリーダーの“心からの愛”。

そして、つねに一人ひとりを注意深く観察し、小さな成長や変化をタイミングよくしっかりと認めて、ほめる。子どもたちの自信や達成感を大きくふくらませることのできる“スキル”がキャンプリーダーにあったからこそ、子どもたちは「自分をこんなにも愛し、大切にしてくれるこの人と、もっとコミュニケーションしたい」と、すなおな自分を表現することができたのである。大きな安心感に包まれた子どもたちは、英語だけでなく、どんなことにでも、まちがいを恐れずに積極的に挑戦することができたのだ。

私たちは、子どもたちに直接関わるキャンプリーダーこそがキャンプの成否を分ける重要な要因であると考え、その採用と育成に、もっとも時間とエネルギーを費やした。キャンプリーダーの要件としては、英語が堪能であることはもちろんだが、それ以上に、このキャンプの趣旨に共感し、子どもたちへ心からの愛情を注ぐことができる人かどうか、を大切に考えた。

今年度、新規の採用は行っていないが、過去2年間の採用に際しては、通算250名を超える応募者の全員と面接した。教育観や人生観を聞き、面接官は子どもに扮して、子どもが好きか、自然に子どもの目線に立てる人かどうかを見極めた。

このようにキャンプリーダーたちは、十分な資質を備えたうえ、今年は全員が経験者（15名が3回目、13名が2回目）という状況でもあったが、企画の段階からいっしょにプログラムを考えることで当事者意識と一体感を高め、合宿・研修を通じて価値観を共有し、子どもへの接し方のスキルをさらに高めるなど、万全の態勢で子どもたちを迎えいれることができたことが、大きな成功要因である。

また、プログラムの策定においては、一つひとつのテーマに沿った目標を設定し、もっとも効果的と思われる配列を施すとともに、過去2年間の経験を生かして、メンタルケアの視点を重視した。とくに、子どもたちがイマージョンキャンプという特別な環境に少しでも早く慣れ、キャンプに集中できるようにするために、英語の世界に入る直前の日本語オリエンテーションを充実させた。

生活面のルール説明、同室の子どもとのコミュニケーションの時間を十分に確保することで安心感を持たせ、また応募の段階で子どもたち自身が書いた「キャンプへの意気込み」や「夢」を読みかえすことによってモチベーションを高めて、キャンプに臨むことができたことの効果は大きかった。

すべては「子どもたちのために」。この一点に向けて整えられた環境の中で、子どもたちは持てる力を存分に発揮することができたのである。

イマージョンキャンプ概要

1．概　要

実施要領

対　　象：小学４～６年生。日頃から英語を意欲的に学習している健康な男女。
キャンプ期間中、起床から就寝まで基本的な自分の身の回りのことがひとりでできる方。
英検4級程度または公文式英語教材学習者の場合、ＨⅡ教材終了程度の英語力を持っている方

人　　数：56名

日　　程：2003年8月7日(木)～8月16日(土)10日間

場　　所：公文国際学園(神奈川県横浜市)

費　　用：130,000円(現地までの交通費を除く)

スタッフ：KUMON社員21名、大学生4名(APU学生2名、ら・ぷらす学生2名)、東海市小学校教諭2名

キャンプリーダー：立命館アジア太平洋大学(APU) 留学生28名(18カ国)

企　　画：日本公文教育研究会

企画協力：立命館アジア太平洋大学(APU)、公文国際学園、船橋洋一氏(朝日新聞コラムニスト)、平松守彦氏(前大分県知事)、坂本和一氏(APU学長)、吉田研作氏(上智大学教授)、木下玲子氏(国際ジャーナリスト)

(順不同・敬称略)

２名の現役小学校教諭のスタッフ参加

今回、愛知県東海市教育委員会より２名の教諭が教員研修の一環として参加した。これは、今年５月に文部科学省発行雑誌「マナビィ５月号」にイングリッシュ・イマージョンキャンプの活動紹介記事が掲載されたことがきっかけで、実現したもの。研修期間も含め、約16日間を公文スタッフおよびキャンプリーダーと過ごし、キャンプを体験した。

2．参加者の募集

募集方法

5/11(土)、朝日小学生新聞、毎日小学生新聞に広告掲載。同時に、インターネット上の公文教育研究会ホームページで告知した。また、公文式学習者には、４月下旬より、全国の公文式教室を通じてパンフレットを配布および会員誌「ケイパブル」「ＩリーグNEWS」への広告掲載を行った。

応募状況、抽選

締切日6/12(木)までに、373名の応募があった。応募形態は、パンフレットの一部となっているエントリーハガキに、氏名、住所、生年月日、性別、学年、電話番号を記載して応募する形態をとった。

応募者の中から、厳正なる抽選により56名を決定した。(内訳：４年生14名、５年生20名、６年生22名)。その際、アクティビティ進行上のバランスから、男女比は半々になるようにした。また、結果的に56名すべてが公文式学習者となった。

3．キャンプリーダー

キャンプリーダーの募集

今年の28名は、昨年のキャンプリーダー47名の中から選抜したため、あらためて募集・選考は行わなかった。選抜は卒業年度が早い順に行い、参加のチャンスが残り少ない人から参加できるよう留意した。

なお、昨年のキャンプリーダー採用では、綿密な説明会・面接および3回の別府研修を行っている。

(詳細は2002年度キャンプレポート参照)

キャンプリーダーの研修・合宿

キャンプのスムーズな運営、またキャンプリーダー間や、キャンプリーダーとKUMONスタッフとの信頼関係を構築するために、最も力を入れたのはキャンプリーダーの事前研修である。トータル４回におよぶ研修では、キャンプの目的共有、子どもたちのメンタルケア、指導基本の確認、プログラムの演習、意見交換等を行った。

また、今年初の試みとして、キャンプリーダーのうち初年度から参加している10名をプランニングメンバーとして位置付け、スタッフのプランニングメンバーと一緒に、10日間のプログラム案を検討・決定した。研修では、「英語」でのコミュニケーションをいかに促すか、子どもたちに明るく接し、安心感、信頼感を高めること、認めて、ほめて「自信」を持たせることの重要性、子どもたちが能力を発揮しやすいプログラムとは、などについて活発な意見交換がなされた。

特筆すべきはキャンプの回を重ねるごとに磨かれていくキャンプリーダーたちのスキルである。６月の研修で行われた大分ミニ・イマージョンキャンプでは、４時間という短時間にもかかわらず、子どもたちをリラックスさせ、英語を引き出した彼らの見事なスキルが印象に残った。

【第1回　プランニング合宿】
日　時：3/27(木)～29(土)
場　所：つるみ荘(大分県別府市)
対　象：キャンプリーダー10名(プランニング)
目　的：①参加後の子どもたちのイメージ共有
②キャンプの「一日の流れ」枠組み作り
③10日間の大まかな流れ作り
④キャンプリーダー研修要素の洗い出し

【第2回　プランニング合宿】
日　時：5/31(土)～6/1(日)
場　所：つるみ荘(大分県別府市)
対　象：キャンプリーダー10名(プランニング)
目　的：①「一日の流れ」と「アクティビティ・マニュアル」の内容確定
②6/28～29および8/3～8/5のキャンプリーダー研修に必要な要素の洗い出し

【第3回　全員合宿＆大分Mini Immersion Camp】
日　時：6/28(土)～29(日)
場　所：1日目別府ビーコンプラザ、2日目APU
対　象：キャンプリーダー全28名
目　的：①公文式教室見学による公文式の理解
②全員での目的、価値観共有
③10日間スケジュールの共有、質疑応答
④子どもたちへの対応ロールプレイング
⑤大分ミニ・イマージョンキャンプ※
※56名という規模の対応、運営のイメージを固めるために、1日プログラムを開催。募集要項の基準を満たす大分県内の公文式学習者を募集し55名が参加した。

【第4回　キャンプ・プレ合宿】
日　時：8/3(日)～5(火)
場　所：公文国際学園
対　象：キャンプリーダー全28名
目　的：①会場の下見、セットアップ
②「一日の流れ」確認
③「10日間プログラム」確認
④「アクティビティ・マニュアル」確認
⑤子どもたちの状態イメージ共有

4．キャンプの内容

スローガン・基本指導行動

Don't be afraid of making mistakes.
Let's try communicating in English.
間違いを恐れない、恥ずかしがらないで、
英語でのコミュニケーションに挑戦しよう！

全体プログラム

テーマ	DAY	AM	PM
お互いを知ろう	1		オリエンテーション 入学式 アイスブレーキング
	2	学内探検ツアー	グループ旗作成
私たちの世界とお互いの文化を理解しよう	3	パソコン体験	世界の国めぐり
	4	クラブ活動	チャレンジ・ランキング 後、(夜)バーベキュー
世界の中の自分を感じる	5	遠足(横浜こども自然公園) 野外炊飯	
	6	クラブ活動	Tシャツ作り
未来は君のもの	7	スポーツ・フェスティバル	キャンプファイヤーの楽器作り
	8	キャンプファイヤーの衣装作り	パフォーマンスの練習 (夜)キャンプファイヤー
私たちはひとつ	9	発表会準備	発表会 (夜)パーティー
	10	卒業式	

★すべてのプログラムは、「テーマ」に沿って企画した。
★日本語オリエンテーション：入学式前のオリエンテーションは、大切なこと(安全面、生活のルールなど)を確実に伝えるため、日本語で行った。
★参加者が自分から、英語を使って発表をする場面をできるだけ多く設定した。
★クラブ活動：キャンプリーダーが主体となって7つのクラブ(①音楽、②ダンス、③スポーツ、④料理、⑤アート＆クラフト、⑥図書、⑦ニュース＆カメラ)を企画・運営。子どもたちが自分でクラブを選びエントリーした。
★スポーツ・フェスティバルやチャレンジ・ランキング(子どもたちが複数のゲームをする企画)など、体を動かし、ストレス発散をはかれるものを設定した。

一日の流れ

時　間	項　　目
7：00～	起床
7：30～	Morning Exercise
8：00～	朝食
8：45～	学習タイム※1
10：00～	アクティビティー①
12：30～	昼食
13：10～	お昼寝
14：00～	アクティビティー②
16：30～	グループ・ミーティング※2
18：00～	夕食
18：30～	全体ミーティング※3
19：20～	入浴、洗濯、自由時間 キャンプリーダー＆スタッフミーティング※4
21：30	就寝

※1：学習タイム
学習習慣を保つために、毎朝1時間の学習タイムを設定し、各自持参した課題を学習した。

※2：グループ・ミーティング
グループごとに、自分たちが撮ったデジカメ写真からその日のベストショットを1枚を選んだ。
また、子どもたちは英語で日記を書き、キャンプリーダーが一人ひとりの日記にコメントを記入。
グループ内で日記を発表し、全体ミーティングで日記を発表する代表を決めた。

※3：全体ミーティング
夕食後、各グループ1名の日記の発表。今年は、1日目から子どもたちの積極的な発表があり、リーダー・スタッフを驚かせた。またグループやクラブから歌やダンスの発表があった。翌日のプログラム、準備物の確認をして終了。

※4：キャンプリーダー＆スタッフミーティング
毎晩、キャンプリーダーとスタッフによる全体ミーティングを実施した。リーダー、スタッフ問わず、子どもの様子や、運営上の問題点などについての意見・改善提案が行われた。
また、運営がスムーズでなかったり、キャンプリーダーたちのストレスが増大した時にも、問題解決の場となったのは、ミーティングであった。リーダーとスタッフは、目の前の問題について一緒に考え、できるだけ迅速な対応を心がけた。「私たちは子どもたちのためにここにいる。だから多少の困難は乗り越えられる」という共通の思いが、全員の気持ちを前に向かせていた。
このミーティングでは、キャンプリーダーは思っていることを遠慮なくストレートにぶつけ、彼らのこの姿勢に、日本人スタッフも多くの刺激を受けた。
10日間のキャンプでは、問題はかならず起こる。肝心なのは、そのときに、キャンプリーダーとスタッフが信頼し合い、一丸となって対応できるかどうかである。そのためには、十分なコミュニケーションが不可欠であることを実証したミーティングであった。

5．英語を出しやすくするためのしかけ

グループ制

子ども7人(男女、学年混合)とキャンプリーダー3～4人で計10～11名の8グループを編成。英語でのコミュニケーションを促進し、お互いを深く知り合うためにもメンバーを固定するグループ制が有効であると考えた。子どもたちは、自分のグループのリーダーが明確であることで安心感を持ち、仲間意識も育った。

クラブ以外のプログラムは、このグループ単位で活動した。また、拠点となるグループルームを設置した。

56名という規模は、キャンプリーダーがグループの子どもだけでなく、他グループの子どもも含め全体的な様子を把握できる規模であったため、お互いの情報共有も促進された。

パスポート

初日、子どもたちにパスポートが配布された。すべて英語で、内容は、スローガン、毎日のスケジュールと準備物、Key Phrases、日記、歌詞、参加者・スタッフのリスト、メモ・住所録、緊急連絡先である。

英語での日記

子どもたちは毎日グループ・ミーティングの中で、その日のできごとや感想を英語で書いた。何か課題があって書くのではなく、「自分が書きたいことを書く」という経験は、子どもたちにとって英語を使っての大きなチャレンジとなった。

キャンプリーダーは、一人ずつの日記のすべてにコメントした。子どもたちは一人ずつ、自分の日記を声に出して発表。そのたびに大きな拍手とほめ言葉のシャワーが浴びせられ、大きな励みになった。英語を話すのは難しいと思っていた子どもたちも、「自分が書いた英語、自分の言葉で気持ちを伝えることができた」という成功体験によって自信を大きく膨らませた。

6．情報発信

ＥＩＣウェブサイトの活用

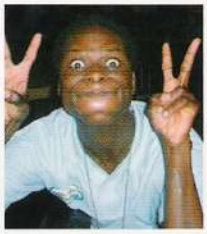
今年の8月に、インターネット上にイマージョンキャンプウェブサイトをリリースした。このサイトには、キャンプ期間中の「photo news」(下記記載)の掲示や、自由に発言できる掲示板を設置し、子どもたちとキャンプリーダーが、キャンプ後もコミュニケーションをとれることを狙いとしている。キャンプ後、掲示板は大部分の子どもたちとキャンプリーダーが利用しており、英語の書き込みであふれている。子どもたちが間違いを恐れずに、リーダーや友だちへ気持ちを伝えたい一心で書き込んでいる様子は、非常に感動的である。

http://www.immersioncamp.com

ＥＩＣ Photo News(e-mail)の配信

期間中の子どもたちの様子を保護者や関係者へ伝えるため、「ＥＩＣ photo news」を毎日配信した。これは、各グループがグループミーティングで選んだベストショットの1枚を、メールにまとめたものである。受け取った保護者および関係者からは、「子どもたちの変化の様子がよくわかる」と大変好評であった。

Camp Leaders


ABLO
（マリ）

ANGELA
（韓国）

ANNA
（ロシア）

CHAN
（韓国）

COSTA
（スリランカ）

DUSHI
（スリランカ）

ELLE
（サモア）

FUNAKI
（トンガ）

HELEN
（ニュージーランド）

HUONG
（ハンガリー）

J.J.
（マレーシア）

JOSHI
（ネパール）

JUSTUS
（ケニア）

KISSA
（フィリピン）

KWAME
（ガーナ）

MALI
（スリランカ）

MARI
（イラン）

MARIAN
（フィリピン）

MAWAN
（インドネシア）

MAZHAR
（シンガポール）

MORSE
（フィリピン）

NANA
（ガーナ）

REGNAR
（フィリピン）

SHAUN
（ニュージーランド）

SHRADHA
（インド）

SUSAN
（ケニア）

TINGLI
（シンガポール）

VAUGHAN
（オーストラリア）

Participants

Aika
（6年・東京）
仲間といっぱい気持ちを交換したよ

Chihiro
（4年・栃木）
英語を日常生活で使えるようにしたい

Eri
（6年・東京）
キャンプリーダーに会いに行きたいな

Erika
（6年・千葉）
夢の通訳を目指して英語を続けていく

Fumi
（6年・栃木）
英語でしゃべるとみんな友だち

Hirona
（5年・神奈川）
楽しい時、そして友だちをつくった

Hironori
（5年・新潟）
キャンプリーダーは楽しい人ばかり

Kanae
（5年・千葉）
キャンプは一生の思い出

Kanjin
（5年・神奈川）
英語が通じないこともあった。もっと勉強する!

Kazuki
（5年・茨城）
英語も勉強して科学者をめざす

Kazunori
（5年・岡山）
いろいろな国の人を助ける仕事がしたくなった

Marina
（6年・埼玉）
もうなにもこわくない勇気がもてた

Masatoshi
（6年・千葉）
英語でもっと文章が書けるようになりたい

Maya
（6年・静岡）
キャンプリーダーには何度も助けられた

Miai
（6年・長野）
「やればできる！」を忘れない

Minami
（6年・岐阜）
外国の人と身近に接していることに感動!

Ryuki
（6年・愛媛）
将来の形が少し見えてきた

Satomi
（6年・神奈川）
世界保健機関で働く夢に近づいた

Satoru
（5年・東京）
恥ずかしがらずに英語が言えた！

Sayaka
（5年・静岡）
今度会ったら、もっと英語が話せるSayakaになっているよ

Sho
（5年・神奈川）
英語で、いろんな国の人と仲良くなる

Yasuhiro
（4年・埼玉）
たくさんの友だちができた

Yoshihide
（5年・茨城）
英語を自由に使えるようになりたい

Yoshihiro
（5年・大阪）
これからも英語をがんばります

Yoshiki
（6年・千葉）
英語力に自信がもてた

Yoshito
（6年・愛知）
I'm not be afraid of making mistakes!

Fumiko
（6年・青森）
世界じゅうの人は友だちでつながっている

Hana
（4年・福岡）
友だちどうしでも英語で話せた

Haruna
（6年・熊本）
キャンプの仲間は世界へ広がる大きな家族

Haruya
（6年・神奈川）
外国の人も同じ人間だよ

Hikari
（4年・熊本）
このキャンプのぜーんぶが大大大大好き

Hiroaki
（6年・奈良）
英語は大切な言葉なんだ

Kenji
（4年・鳥取）
来年も参加したいから、英検4級をめざす

Kenta
（5年・神奈川）
外国人なんていない。ぼくたちはみんな地球人だ

Kento
（5年・香川）
We can make friends all over the world.

Koji
（5年・福岡）
世界じゅうの病人を救う仕事につきたい！

Madoka
（6年・広島）
英語を勉強していて本当によかった

Mariko
（4年・滋賀）
英語をペラペラ話せるようになりたい

Miyu
（5年・石川）
英語はとても役に立つよ

Narumi
（4年・神奈川）
もっといっぱい英語を話せるようになりたい

Rei
（4年・埼玉）
いっぱい友だちができて、うれしかった

Reimi
（6年・青森）
英語を知っていると世界が広がる

Rina
（4年・神奈川）
勇気を出してがんばった

Risa
（5年・北海道）
文法が正しくなくても通じるよ

Sho
（4年・静岡）
だれにも経験できないキャンプだった

Taishi
（4年・熊本）
失敗をおそれない自信がついた

Takafumi
（5年・岡山）
このキャンプはぼくの英語に役立った

Takehiro
（6年・愛媛）
物理学者になるぞ、Gets!

Takuya
（6年・宮城）
外国のことをいろいろ知りたい

Tatsuya
（5年・富山）
外国へ行って、外国の人と友だちになりたい

Yui
（4年・東京）
世界中の人が友だちになれば平和が来る

Yuka
（4年・岡山）
毎日楽しくて楽しくて…

Yukiko
（5年・兵庫）
自分自身に自信がついたよ

Yukino
（6年・愛知）
英語で話すとすごく楽しい

Yusuke
（5年・埼玉）
日本のことを英語で説明したい

Yutaro
（4年・京都）
英語圏の人にも対応できる雑貨店をつくる

English Immersion Camp 2003

Group Flags

English Immersion Camp 2003 Report

発　行　日　2003年12月6日
編集・発行　KUMON English Immersion Camp 事務局
〒530-0001
大阪市北区梅田1-2-2　大阪駅前第2ビル9F
公文教育研究会　グループ広報室内
TEL. 06-4797-8777
FAX. 06-4797-8785

●デザイン：(株)スプーン　●編集担当：谷　延尚(くもん出版)

©公文教育研究会　無断複製・転載・翻訳を禁ず